日光川とは（2）

熊澤　良嗣 調

追加情報１５「日光川とは」で、木曽川の二之枝（古般若川）が村久野の瀬頭で二分して、江南団地から瀬部へと西進したものが「日光川」、滝学園南から春明へと南進したものが「般若川」（「般若用水路」）で、般若川が牛洗あたりで分かれて西進したものが今日の「時之島排水路」であると紹介した。

本稿では、その後発見した知見やエピソードを追加して紹介する。

日光川

この川の名前は『浅井町史』では「浅井川」となっている。他に森興司夫氏の『浅井風物考』でも「浅井川」と書いてある。犬山の千田英元氏の『木曽川の水と尾張地域』には「二之枝は瀬頭という所で般若川と大江川に流れを分かち、その主流は時之島から浅井の池に注ぎ...」とあり、日光川は「大江川」とされている。「時之島から...」はいささか腑に落ちないが、確かに日光川は浅井の池の先で大江川に繋がっている。

河川管理者の立場からは統一名称が不可欠だろうが、地元の川には地元の地名をつけて呼ぶのが自然であろう。今日では地図に「日光川」と記されているが、これは昭和の高度成長期に補強工事がおこなわれたときからのことで、木曽川・日光川の歴史に詳しい役人が、河口に至るまでの統一名を考えて名づけたものと思われる。

歴史的地名をたどると、この日光川は各地で「古川」と呼ばれていたようである。浅井町の小日比野・河端の日光川右岸添いには「古川筋」という地名がある。また大江用水ができる以前、日光川が温故井池から西進した佐千原交差点の南東には「古川」という地名がある。(『土地宝典』による字名地図には、これらの古川筋・古川のどちらも現在よりも

っと広い範囲に描かれている。）

　更に日光川が佐千原から西南に蛇行しながら進み、太古の木曽川三之枝の川筋である「野府川（のぶがわ）」と合流する三条の南にも、「古川」という地名がある。加えてもっと南に下った萩原町には、「古川新田」・「古川」・「西古川」・「東古川」・「萩原古川」などの地名が川添いにある。

　このように、日光川には「古川」という通称があったようだが、それは西洋化が進んだ明治時代に入ってからのことだろうか。瀬部のあたりでは改修前の新般若用水を「新川」と呼んでいたが、古川である日光川の存在を意識してのことであったと思われる。

　さて、温故井池東で県道浅井清須線に架かっている日光川の橋の名前は「田待橋」と地図に書いてある。ところがこのあたりの地名は「日待塚」であるから、「日待橋」が正しいのではないだろうか。『浅井風物考』の中でも、誰がそんな名前をつけたのかと森興司夫氏が嘆いておられる。

　先日確かめに行ったところ、橋には名前を示すものがついていなかった。帰り道に田圃の中にある１つ上手の橋へ立ち寄ったら、ここに「ひまちばし」・「日待橋」の立派な表札がつけてあった。ただ、ここは字「日待塚」でないのが気にかかる。

時之島排水路

　数年前、「新般若用水」悪水路のバイパス工事が四日市場地内でおこなわれ、悪水は春明方向へ行かないようになった。四日市場の南ですべて時之島排水路に流し、最後は大江川へ落とすように変更されたからである。（木曽川からのきれいな農業用水は、同じ堤防下に埋設された別の水路を流れてきている。）

この時之島排水路を、『浅井町史』では「時之島川」と呼び、「江南市村久野字瀬頭で浅井川と分かれて西南進し、市内春明の北で牛洗分水をなし、西進して瀬部時島の間を突き切り浅井町の南端を西流して古川に入るものだが、後世この水の多くは南方大江川に落ちる」と書いている。日光川（古川）を浅井川と呼んだので、こちらは時之島川と呼んで区別したのであろうか。

ところがこの川は、天保（てんぽう）時代（1830 頃）の『瀬部村絵図』には「セ部川」と書かれており、『尾張徇行記』（1820 頃）にも「時之島村北は瀬部村瀬部川を境とす」と書かれている。同時代の『時之嶋村絵図』ではこの川に名前が書かれていない。当時の役人はこの川の左岸（南岸）までを瀬部村としていたのであろうか。

ところがまた、『丹羽村絵図』ではこの川が丹羽に入り大江川へ流れ込むあたりに「時之島悪水」と書いてある。時之島から流れてくるのでそのように名づけたのであろうか。

さて、『時之嶋村絵図』の時之島排水路は、今の県道浅井清須線を越えたあたりで南西向となり、川幅が急に広くなっている。その広くなった川の右、つまり東浅井町側にも時之島村の土地が描かれ、境界線は浅井山（山林）にまで及んでいる。「川向（かわむかい）」の字名が記してあり、これは時之島側から見てつけた名前に違いない。

この土地について、「浅井山と時之島との境は判然とせず、幕末から明治の初期頃に至ってついに争いが起き、そこで東浅井の七人衆が時之島を相手取り境界の争いとなった」と『浅井風物考』に書いてある。この裁判では東浅井側が勝ったようだが、今でも時之島字川向の字名は残っている。

いずれにせよ、これらの話からは大水で氾濫した昔の川の歴史が偲ばれる。